

## 第2章 南三陸町を取り巻く情勢

### 1 南三陸町の概況

#### ① 自然的・地理的特性

本町は、宮城県北東部、本吉郡南部に位置し、リアス式海岸の豊かな景観を有する南三陸金華山国定公園の一角を形成しています。東は太平洋に面し、西は登米市、南は石巻市、北は本吉町にそれぞれ接しています。



町の面積は163.74km<sup>2</sup>、東西約18km、南北約18kmで、西・北・南西は北上山地の支脈の東南にあり、東は海に向かって開け、西の田東山嶺から海に向っては、北上山地の山麓部、※開析された海岸段丘を経て海岸部に至っています。海岸部は、日本有数の良好な養殖漁場となっています。

気候は、太平洋沿岸に位置するため、海流の影響により夏は涼しく、冬は温暖で雪が少なく、比較的温暖な地となっています。

#### ② 歴史的特性

本吉郡は、平泉(岩手県)の藤原清衡が奥州に強い勢力を持った平安時代、大量の金を産出したため、藤原氏と密接に関係し、平泉黄金文化繁栄の重要な役割を担いました。

文治5年(1189年)、源頼朝の遠征で藤原氏による奥州支配が終わり、この地方も鎌倉武士の所領となります。

南北朝時代からは、牡鹿地方や岩手県南地方まで勢力を拡大していた葛西氏の所領となります。

天正18年(1590年)、葛西氏は豊臣秀吉に滅ぼされ、葛西氏が統治していた広大な領地を木村氏が治めます。しかし謀反が続いたため、秀吉の命を受けた伊達政宗が翌年鎮圧。以来、本吉郡は江戸時代末期までの270年間にわたり伊達氏に統治されました。

明治2年、政府が発令した廃藩置県により本吉郡は桃生県に属し、次いで石巻県、登米県、一関県、水沢県、磐井県へと管轄を変えながら、明治9年に宮城県に編入されました。

明治28年の町制施行により、本吉村が志津川町と改称され、その後、昭和の大合併(昭和30年)により、志津川町、入谷村、戸倉村が合併した志津川町と昭和34年に町制を施行した歌津町が平成17年10月に合併し、南三陸町となりました。

江戸時代には入谷地域が伊達藩の養蚕発祥の地として栄え、これを基盤として明治後半には、養蚕業が発展しました。昭和初期になると養蚕業に代わり水産業が盛んになり、漁業の町としての基礎が形成されました。

また、南三陸町の歴史において特筆しなければならないのが、地震・津波災害との戦いと復興の歴史です。本町は、その地形的な特性から津波の影響を受けやすく、数々の津波の被害があったことを示す

記録は古いものでは平安時代まで遡ります。近代になっても、明治29年、昭和8年の三陸大津波、そして、まだ、多くの人の記憶に残り、語り継がれる被害としては昭和35年のチリ地震津波があります。この津波により志津川地区の市街地は壊滅的な被害を受け、比較的、被害の少なかった歌津地区の多くの住民が、被災者の救援活動にあたりました。

これらの度重なる津波の被害から人々の暮らしを守るため、昭和の初期から沿岸に防波堤、防潮堤の整備が進められるとともに、今日でもその教訓を生かし、自らの安全は自らで守るという強い意識の下、町をあげての大規模な防災訓練が行われています。

#### ③ 経済的・社会的特性

本町は、気仙沼市とともに気仙沼・本吉地域の行政、経済、医療、文化における中心的な役割を担う地域として発展してきました。

経済面では漁業、特に養殖漁業が町の発展において大きな役割を果たしました。古くからノリ、カキ、ワカメ、ホヤなどの養殖が行われ、昭和50年代になると世界に先駆けたギンザケ養殖が多くの水揚げを誇りました。近年では、ワカメ、ホタテ等の養殖も盛んに行われ、資源管理型漁業を積極的に推進し資源増大

に努めるなど、圏域の経済発展に大きく貢献しているほか、健康食品・医薬品の原材料としての海産物の活用といった可能性も高まっています。

こうした水産業の発展に伴い、本町の人口は昭和30年代には25,000人を超えるまでに増加しましたが、その後、様々な要因から人口減少が続き、平成17年の国勢調査においては18,645人となっています。

バブル経済崩壊後の全国的な経済停滞、第一次産業の先行き不透明感等からくる担い手不足などの影響もあり、本町の各産業分野も厳しい経済状況に置かれており、定住人口の維持・拡大の観点からも、地域資源を活かした創業等による雇用の場の確保も重要な課題となっています。とりわけ、本町における豊かな自然環境や農業、水産業といった「生業」<sup>なりわい</sup>を活かした体験型観光交流サービス業は、全国、県内でも注目を集めるものになってきています。

本計画期間中には、町民の長年の悲願でもある三陸縦貫自動車道登米志津川道路が開通する見通しで、これにより東北の中核都市圏である仙台都市圏との時間・距離が大幅に短縮されることになります。広域圏としては気仙沼・本吉圏域に位置付けられている本町ではありますが、仙台都市圏、石巻都市圏などの都市との交流人口の増加を念頭に置きながら、これを町の活性化に活かしていくことも重要となります。



※開析 地表面が多くの谷で刻まれ、その連続性を失って細分化されること。